日本書紀傳

廿二卷六

和書
一〇五二二號

七十一

内一二六八五號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (80)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
内閣文庫

可し法を能理と云し本同言ふて宜て其法制を人ふ
行いしむるふ出たる者あり通證ふ法ぐ宜也上之所宜
下奉而行謂之法（所謂律令格式是也）と云るハ實ふ謂ひたる言ありけり
然ハ此の法ハ公り御令（御令を犯す者是）あり有犯此者とハ犯罪（ツミオカシ）の
人を云あり必債解除とハ其を律させ給ふ道有る此
を云あり又此條理を分別ち知ずハ有べからぬ事の
ハ云べし右の第八詔ふ今新御事法者常事を波不
有と有ハ其前ある第七詔の事を御事法とハ云ふり
常事ふ波不有とふ非常の事ふる由ふて前詔ふ今米
豆良可ふ新伎政者不有本由理行来迹事曾止詔と有
る此を云あり然るハ今度奇らしく新ある大御政を
行ハせさせ御在（知）坐ける故ふ更ふ然令宜給へるふ
るふて右ふ新伎此と云る即御事法ふて
公の御令を行ふを政と云るふりけり

内一二六八二號

是後素戔嗚尊曰諸神逐我
我今當永去如何不與我姊
相見而櫨自徑去歟迺復扇
天扇國上詣于天時天鈿女
見之而告言於日神也日神

曰吾弟所以上來非復好意
必欲奪我之國者歟吾雖婦
女何當避乎乃躬裝武備云
云

素戔嗚大神高天原より天降り御在し坐し着せ給へ
るハ先此大八洲國なり上件の傳共ハ其大神の此大

八洲國ニ降著セさせ御在ー坐ける程衆神共ニ入奉
るず共ニニ距て終み新羅國ニ逐降し奉ル多り上
二百四十五下ニ註るが如く下貴第四ノ一書ニ素戔嗚尊所行
無狀故諸神科以千座置戸而遂逐之是時素戔嗚尊即
其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處乃興言
曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡中略初五十猛
神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸遂始
自筑紫亢大八洲國之内莫不播殖而成青山焉中略下之所
見たる此文ニ盡以持歸ニ有を以し此大八洲國ニ天
降るせ給ひ其ニ新羅國ニ降到るせ給ひ其曾尸茂

所以称五十猛命為有功之神即紀伊國所坐大神是也

梨の處ニ居るひ御在ー坐けりけるー但右ニ中略ニ云
川上所在烏上之峯時彼處有呑人大蛇素戔嗚尊乃以
天蠅斫之劔斬彼大蛇時斬蛇尾而刃缺即擘而視之尾
中有一神劔素戔嗚尊ニ奉於天此今所謂草薙劔矣ニ云文有此
ニ書第二ノ書ニ出雲國ニ降着セ給へるるが所見たるが
如く再繁ニ天ニ出雲國ニ降着セ給へるるが此ニ在
ハ傳の誤ニ為ル又其第五ノ書ニ素戔嗚尊曰韓鄉之島是有金
銀若使吾兒所御之國不有浮宝者未是佳也乃拔鬚髯
散之即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成枝眉毛是成
櫲樟已而定其當用乃称之曰杉及櫲樟此兩樹者可以
為浮宝檜可以為瑞宮之材柀可以為顯見蒼生奥津棄
戸將卧之具夫須噉八十木種皆能播生干時素戔嗚尊

其雜下二百九十五下ニ在リ

之子號曰五十猛神命妹大屋津姫命次抓津姫命凡此
三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也之所見たる此
ハ右の箸四一書ハ此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之
東渡之有り如く此大八洲國ハ渡り御在し坐る上ハ
ての御事あり其ハ此ハ韓鄕之島之有る下ハ必者の
辞を添て訓べき所みて者ハ我と彼と物と二ハ判つ
言あり然ハ大八洲國是者無金銀韓鄕之島者是有金
銀之此ハ見べき所みて有りけり次ハ吾兒所御之
國之云ハ此大八洲皇國ハ御在し坐ての御言ある事申し
更あり不有浮宝者未是佳也之宣へるし先ハ韓地よ

り以埴土作舟乘之東渡之有り如く未浮宝の出来始
るさる時あるる故ハ然る埴舟ハ乘せ給へるを以て
此をハ浮宝之ハ云へ〳〵を木更ハを以て作り乘ひと所
思〳〵たる御言擧之云者あり然ハ此一書の故事ハ
皆〳〵ハ此大八洲國ハ帰渡り御在し坐たる御上ハ
ての事ありけり(新羅國の事也此地吾不欲居て詔給ひし)惜右ハ不殖韓地盡以持帰之有るを
ハ實ハ幽深き致有る御事ハて右ハ所見たる如く
尊衆神ハ距り坐て新羅國ハ渡り御在し坐しるとし
彼天上ハて解除の御事御在し坐しる實ハ清こし
き大神之成るせさせ御在し坐けるる故ハ衆神ハ宿

をたせ給へりしうどし借奉ゝす夜晝と憩息ふ事無く辛苦あゝせ給へれども其ふし慍給ふす很こり給いそ初の如く御在し坐ましかハ如何ゐる御荒びを〻成し給ハまを然る國神あたふ御心を遣せ給ひて露し爭ハせ給ふ御氣しきの御在し坐ゝめる仰くあゝし甚可畏く云へハ得ふ云ふ斷たる清く明く正しく直き大神ふゐ渡ゝせ給へる證ふハ有ける然る韓地ふ居ゝ將く欲せすと詔給ひて更ふ此大八洲國ふ御船發して帰渡ゝせ御在し坐けるふ衆神の共ふ距奉ゝすゝ其師給へりし五十猛神をたふ有功

之神と稱奉る程の御事あり況て此素戔嗚大神の御有功ふ於てハ計へし盈し難く申し述難き迄ふ御在し坐べき御事申すし更るハ先ふ距き奉りし衆神も此大神を大神として仕奉りけるし其衆神の此大神ふ仕奉ゝるし御事何を以て知ると云ハ所以稱五十猛命為有功之神と有ハ誰ゝ稱奉れる事とハ思ふ始自筑紫元大八洲國之内莫不播殖而成青山焉と見えたる其形狀を直ふ見奉れる衆神の稱奉れるふゝすハ所以と引結く可き文ゐゝさりける者をや又第五一書ふ此三神の御事を即奉渡於紀伊國と云る其渡し奉れる主を指て素戔嗚尊の御事と為ちや衆神の事と云ちや克て言の意を思ひ合せ神眼を活ゝうせて知へき者ゐゝ

偖瑞珠盟約章ふ所見なるゝ如く此大神の清明き御心顯りれさせ御在し坐て男御子を其誓

約の御間ふ生出させ御在し坐けるふ是時天照大神
勅曰原其物根則云し者是吾物也故彼五男神悉是吾
児乃取而子養焉と有て傳十五三百七十十六三十一丁十八五十
下ふ註るが如く此男御子等ふ其物根の由ふ縁て天
照大神みし御子ふ坐し其成し給へる御事ふ就て素
戔嗚尊みし御子と御在し坐て其第三人書ふ故日神
方知素戔嗚尊元有赤心便取其六男以為日神之子使
知天原と所見たる即是高天原ふて天津日継と定奉
らせ給ひて此顕國ふ天降し給ひ御下構の御在し
坐ける御事ふを其ふり此章ふ所見たるが如く其

天津罪を犯給へるが故ふ如此逐ひれて天降り御在
し坐けれども其解除の信ふ依て然あひ清く明く正
しく直く立復らせ給へる上ふ其天神御子の所
知省む皇大御國の事所思して韓地ふ居よく欲せず
と宜ひ埴舟ふ乗て達て帰渡らせ給へる上ふて八一向ふ
其御事のみ御心ふ係させ御在し坐す御事ありしが
ハ吾児所御之國不有浮宝者未是佳也と詔給ひて已
く外蕃諸國を馭して我皇大御國の御奴國と成し給
ふ可き御事を先斯みて神量らせ給ひ其天上より持
降り坐る八十樹種の外ふ御身自の毛髪を抜て散し

給ひて彼第四の一書に謂ゆる凡大八洲國之内莫不播殖而成青山焉と有り如く大八洲國内を青垣山麗美しく成し給へるは即皇御孫尊の御為天下人民の為なる事右の第五の一書に檜可以為瑞宮之材被可以為顕見蒼奥津棄戸將卧之具と有を以て當昔の御所行の御有狀をもむ想像り奉る可き御事なりける其い本さり諸神の心の任に根國底國に罷るむと所思し者を者り其先に生奉らせ給へりし皇御孫尊の御上の御事共を整備へ置せらせ給ひて御心も安く御在し坐むと所思さむ事は我人の情に比べて思ふ可き

御事なるべし　若て其外國を帰せ給はむ事を後に天上に参上らせ御在し坐ける御時に不契り聞えせけるを祝詞講義に云る如く祈年月次等祭詞は神代の遺文なりて謂ゆる天津祝詞の太祝詞なるに太神宮詞に青海原者掉校不干舟艫能至留極大海乃舟滿都と氣氏と有は此に本着る者と見えて又其下に遠國者八十綱打掛氏引寄如事と有し此大神を後に八東水臣津野命と申して國引給へり御事を以て宣ひ續けさせ給へる者なり此を以て皇御孫尊の此天下を所知者と御事に二柱神共に神議に議らせ給へり御事の基と少縁なるを御坐けるを知べし然は此に此大神の迴復扇天扇國上詣千天と有は右に云るが如く下章第四の一書第五の一書共の故事を過して後に有つる事なりけり其は先に神逐に逐はらさせ御在し坐る其降着せ給へるは此大八洲國の地みて其より衆神に

ホ距がりて新羅國へ到著せ御在し坐て曾尸茂梨の
處ホ留まり住給ひ其より埴舟を作り乘らして此大
八洲國ホ帰渡らせ給ひ其御子五十猛神を師て國内
悉く青山と成し給ひ其より直ホ天上ホ再参上らせ
御在し坐けるホて此御時の御住居ハし其三柱の
御子神等と共ホ紀伊國ホ御在し坐けるホハ非しか
神名式ホ在田郡須佐神社名神大月次新嘗 と見え和名抄郷
名ホ須佐と出たる是ホり又其三神ハ共ホ其名草郡
ホ御在し坐ふるホ同郡ホ須佐神戸同抄ホ見え式外
ホてハ有れども此ホハ在田郡須佐神社の別社有て

其紀伊國所坐大神と聞ゆる五十猛神の御在し坐せ
式の伊大祁曾神社名神大月次相嘗新嘗 の西南ホ口須佐村奥
須佐村の間ホ立せ給へるホハ必深き故由有る事ホ
る可き者ホり然ホハ出雲國の御事蹟ハ其再度の時
ホ天降らせ給へる上の事ホりけり右の須佐神戸の事ハ予安政六癸
丑年伊勢詣より係て其二月廿日ホ詣奉りて正した
る説ホり南紀神社録ホ其在田郡須佐神社の神威の
御事を記せるホ正保三年十一月上旬隣里辻堂村池
尻孫三郎俄然両眼直視手足麻木而遍体流汗親族大
驚次焉語曰我是須佐大明神也此般為崇於神宮之婦
汝曹従命而還宮余甚恍然汝輩素疎我如古作走馬場
又當以九月十四日為祭神也今以正月十四日是非吾
意也九月十四日者我子山東伊駄祁曾奈日而我祭本
是一日者也且神職無官而奉仕乎余以神扉之開闔如
俗民之閉房又務名利而忽之遇于我矣早可脱名絆利

覇世伊駄祁曽嘗曰何不討彼乎然余以為此社家累世奉我者也故赦焉と有る此は近き世の事なれ共神怪奇談の比ゐい非を甚慥なる事なれ共然るに此なる御言の中ふ〳〵伊太祁曽神社の御事を我子と宣へるは本より然る事ふ〳〵各其御社の神事ふ至る迄し同じ九月十四日なるなると神代より以降殊ふ止事無く御在し坐る所以の書又其第一書ふ坐せばなりけり然れば下章ふ是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上と有は此一書の末ふ復還降焉と有る此再度の御天降の御時の事ふして右ふ云る第四の一書ふ降到於新羅國と云るは後なる事已ふ論めるるは如し其は上二百四十五丁ふも註るが如く其は古事記肥河段ふ其足名椎手名椎神の彼は俣遠呂智の事を語申せるふ亦其身生蘿及檜榲と云る檜

榲は上二百八十八丁ふ引る第五の一書ふ所見て即其素戔嗚大神の鬚髯と胸毛より始て化出たる者なり又其第二の一書ふ素戔嗚尊乃教之曰汝可以衆菓釀酒八甕上と所見たる其衆菓は第五の一書ふ夫須噉八十木種皆能播生と有る是なり然れば其初て天降らせ給へる事を出雲国と見る時は然る齟齬の事共出來て如何ともも治む可き方無く且其ふ大蛇を平くげて神劔を得させ給へるも即其時の事ふ非ずや若初て天降り御在し坐ける御時の事と為る時は其再天ふ参上らせ給へる度ふ如何でるも持参上らせ給はざる此

寺ハ正しく後の度の天降らせ給へるなり其出雲国
なりける證ハ有けるに但其第四一書ハ以植土作
舟楫之東渡到出雲国簸川上所在鳥上之峯と有る傳
の混れたるなりて叶ハざる事有り右ハ東渡とハ新羅
国より唯東方なる大八洲国を指て渡坐るまこと有
けれ其ハ口訣ハ肥前国西南沖在五十猛島と云ひ肥
前風土記ハ杵島郡縣南二里有一孤山從坤指艮三峰
相連是名曰杵島坤者曰比古神中者曰比賣神長者曰
御子神一名軍神動ハ則兵興矣
其比古比賣二神ハ上十三ハ註るが如く此大神と其

天より師し来坐し大夜之女命ハ御在し坐へし御子
神を一名軍神と云るハ五十猛神ハ思合せらるるを
猶出雲風土記ハ飯石郡來島郷伎自麻都美命社坐故
云支自真と有も神名を以て地名と成るを見れば
此ハ五十猛神なりて後ハ其杵島より移奉るか如く
思えなり又神名式ハ筑前国御笠郡筑紫神社名神大を
和尓雅ハ五十猛命也と有り又伊豫国新居郡伊曽乃
神社名神大伊豫郡伊曽能神社と有り五十猛神と所思
しるを其第四一書ハ遂始自筑紫凡大八洲国之内莫
不播殖而成青山焉と有て其始ハ素戔嗚尊御其子五

十猛神と有りしが共に肥前より筑紫より其より四国の北面を経て紀伊国より渡くせ給てゆはもと推奉り奉るるるるの然しが右の東渡ハ句ゐて到出雲国云この事ハ別條より混れ入たる者なるむ有ける若右の如く連けるむるハ其神劔を奉くせ給てるも其再度天より参上るせ給ふ時ハ素戔嗚尊の御自ら奪上りて奉くせ給ふ可き御事なりけれ然るを右ハ乃遠五世孫天之菅根神上奉於天と有ハ古事記ハ依ハ實ハ五世孫なして大国主神の御父ハ當れり共ハも第一ノ一書の説も大国主神ハ素戔嗚大神より六世孫ハ當れり いと雖も傳の誤れるるて實ハ正書の如く大国主神ハ素戔嗚尊の御子なして御母ハ稲田姫命ハ御左し坐ゆ然るば天之菅根神ハ如何なる神ぞと云ハ神名秘扶ハ天之冬衣神を五十猛神の亦若と為る實ハ菅根ハ猶ホ根の義なれば允當れり然れども何ぞしても其劔を得給ふ事天ハ奉る事共ハ再天降坐る後なるで

ハず 又其第二ノ一書ハ是時素戔嗚尊下到於安藝国可愛之川上也と有も其出雲国ハ天降くせ給てる時の御事なり其ハ古史第六十七段徴ハ引れたる鳥上二水考證と云物ハ夫安藝国者非国名也出雲風土記所載意宇郡安來郷而今屬能義郡而作八杉郷者是也下略と云る實ハ然る説なして師も諾ハれたるが如し備此ハ天降坐る慥なる證ハ其出雲風土記ハ意宇郡東南二十七里一百八十歩神須佐乃烏命天壁立廻坐之尓時來坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安來也と有る是なり此吾御心安平成詔と有ハ先ハ神逐ハれて天降

り坐し時まり辛苦降矣と云程の御事まて御在し坐
けるま次度の御天降い天照太神ま親元奉るせ給ひ
三女神を始て供奉り神等を従てさせ御在し坐て遥
るま遠き天路まり此ま始て天降り着せ御在し坐て
御心り安く落居させ給てる義なり又其より數と
川上まて大蛇を平るゆさせ御在し坐て神劔を得て
天神り御許ま奉るせ給ひ奇稲田姫命を后神と定め
させ御在し坐むと須賀宮を建させ給ふ始ま言曰吾
心清こと之り御言有て萬ま亀こ長閑まる状まるむ渡
るせ給てりければ此等り御事共を合せても其出雲

国ま御在し坐し着たるい再度り御天降り御時まら
てい御在し坐けめ此ま如此く其御天降り御事り前
後を云るい贅言り如く思ふ人と有るめども其事を
盡し究めずてい此り始終を明くむる事能いざるか
故ま己が心ま今思浮ぶ限を如此るむ長くしく述た
りけるい平田史ま其第六十二段ま右の衆神ま距が
本文まる再昇天り御事を載くれ次の六十四段い三
女神り御事まてば此ま次べき事まて然も有べし其
六十五段まり下章第四二書を載くれたり然れども
上ま云るか如く其次第を以て正し云時い一ま六十
二段二ま六十五段三ま六十六段四ま六十七段五ま
六十三段六ま六十四段七ま六十八段まるが其首ま
此下章第二段まる安藝り事を加てて文を正し故め
て南く可き者まり然無くてい其書の趣も條理立難

くてゝゝ
有けゝ　○是後素戔嗚尊曰ハ先ゝ神逐ハ以て天降
ゝ御在し坐けゝるゝ　遠ゝ世を經て後ゝゝ事右ゝ
引ゝ下章第五一書ゝ所見たゝゝ如く大神ゝ毛髮を
拔散さゝ御在し坐けゝるゝ其出雲国ゝ天降ゝ給ひ
て大蛇ゝ言向けさせ給ふ頃ゝ成てハ已ゝ其身ゝさ
へ生茂ゝ程ゝ事なりしゝバ其第四ノ一書ゝ九大八洲
国之内莫不播殖而成青山焉ゝ云を悉くゝ見竟させ
給へゝ後ゝ宣給へゝ御言ゝ見えなり然ハバ此ハ纂
疏ゝ是後之言於一書中省初文之詞也ゝ宣へゝゝ力
を得て深ゝ其事實を正し雜ふ可き所ゝゝ者ゝ

然ゝを誰ゝ是後ゝ事を上文ゝゝ直て兼て續ゝ
故ゝ大ゝ心を得ざゝ事多ゝゝ其ハ撰者ゝ心を得ぬ
說ゝ云ゝも強ゝゝ非ず　○諸神逐我ハ正書ゝ然後諸神歸罪過於
素戔嗚尊而科之以千座置戸逐促徵矣云ゝ竟逐降焉
第二ノ一書ゝ已而科罪於素戔嗚尊而責其祓具云ゝ用
此解除竟逐以神逐之理逐之ゝ有ゝ古事記ゝハ於
是八百萬神共議而於速須佐之男命負千位置戸亦切
鬚及手足爪令拔而神夜良比夜良比岐ゝ有ゝ此ゝて
其諸神ハ即八百萬神ゝゝ事知ゝ此ゝ備又此ゝて
ハ上文ゝ既而諸神嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無頼故不
可任於天上亦不可居於葦原中国宜急適於底根之国

乃共逐降去て有を兼て此を諸神逐我とハ宣へりし
者なり又上なる此顕国を降著し御在し坐ける程ふ
りし衆神の言を以汝是躬行濁悪而見逐譴者と相共
に云るし右の天上まての神逐の御事を申せるなり
然るに此大神ハしも上に云るが如く已く此初度に
天降り御在し坐ける後に然計り止事無き御功ハ御
在し坐ける故ぐ〳〵に如此其諸神の言の如く根国に
参るべと所思しぐ〳〵ハ全く皇御孫尊に此顕国を所知
し坐しめ奉らせ給ハむ御心のまに渡らせ給てるが
故なり其ハ此下に吾以清心生児等亦奉於御と申給
へるハ其男御子等に添て此国土を悪くる奉

りて天照大神より皇御孫尊に授させ給ハむ御所置
を仰ぎ奉しせ給ハむとの御事なり下百十丁
に云を見て知べし○我今当永去ハ四神出生章に故其父母
二神勅素戔嗚尊汝甚無道不可以君臨宇宙国当遠適
之根国矣逐逐之と有る右に父母二神と有ハ實に
誤なるまて此ハ已に伊弉冉尊彼黄泉国に御在し
坐しまして後に其御母神を乞奉らせ給ひて其国を
乞治せ給てるに始りる事まて御父伊弉諾大神の神
逐に逐ハせ給てる事其第六の書に是時素戔嗚尊年
已長矣復生八握鬚髯雖然不治天下常以啼泣恨故
伊弉諾尊問之曰汝何故恒啼如此耶對曰吾欲從母於根

国只為泣耳伊弉諾尊恶之曰可以任情行矣乃逐之と
所見たるが如し但其傳は古事記と等しく珍子等は
伊弉諾大神の大御身滌の時の御生坐ると云る傳
の有て其の連接はる文まては有れども此神逐の御
事の至ては必如此く無ては叶ふまじき事のまゝ有
けゝ古事記にも故各隨依賜之命所知看之中速須佐
之男命不知所命之国而八拳須至于心前啼伊佐知伎
也其泣状者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以悪神
之音如狭蠅皆満萬物之妖悉発故伊邪那岐大御神詔
速須佐之男命何由以故不治所命之国而哭伊佐知流

尓答白僕者欲罷妣国根之堅洲国故哭尓伊邪那岐大
御神大怒怒詔然者汝不可住此国乃神夜良比尓夜良
比賜也て所見たるが何れも其始は素戔嗚尊の御心よ
り起りて大御父伊弉諾大神の神逐ひの逐はせ給へ
るまてゝ有けゝ但古事記も然まて此の第六の一書よ
の御時の成出させ御在し坐けるは全く傳の誤なゝ
まて其實は二柱御祖神等共の妹妹二柱嫁姪の御在
し坐て彼磐馭駅盧島の天柱の許まて生奉らせ給てゝ
神逐の御事の至ては第六の一書古事記共の大御身滌
の次の在ゝ事其正しきを得たり斯ゝ事共甚混くい
しくるゝ其より兼て瑞珠盟約章の於是素戔嗚尊請
有けゝ
曰吾今奉教将就根国故欲暫向高天原與姉相見而後

永退矣勅許之乃昇詣之於天也と有る是其御父大神
の神逐の御言を諾なひ奉らせ給ひて日神の大御許
に其辭見に參上らせ御在し坐む事を乞奉らせ給へ
るなり此事古事記には故於是速須佐之男命言然者
請天照大御神將罷乃參上天と有て委しくは非れど
も其前文に故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也と
有て其御勅許を仰ぎ乞奉らせ給へるし御事は所
見たり其第二一書に素戔嗚尊將昇天時有一神号羽
明玉此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉故素戔嗚尊持
其瓊玉而到之於天上也と有は此昇天の御事を勅許

させ給へるに就て其御印可を賜はらせ給へるなる
も有ける然れども天上にては其事の意を所知看せ
給はざりし故に天照大神の御方に御疑の御心あむ
御在し坐たりしかば此故に共に御誓の御事に及
ばせ給へるに果して素戔嗚尊の清明き御心の御在
し坐て信に宣ひつる如く男御子を生奉らせ給へら
れに合して天照大神の御方にては御子を生出さ
せ給てはしかば其御疑共已に打解させ御在し坐
て始より其黒き御心の御在し坐す事を所知看し分
させ給てはし故に天照大神にも御同胞の御親しみ（の大御心）

坐るを以て御前去ず召置せ給ひ素戔嗚尊も其始より御志して就給ハむと為させ給てる根国底国ハ罷坐べき御事も何も打忘れさせ給てるが如くして亦も天上ハ留まるくせ給てゆけるとニハ四神出生章

第十一、一書ハ天照太神在於天上日南章原中国有保食神宜ふ月夜見尊就候之月夜見尊受勅而降之有る其ハ天上ハ假初ハ留まるくせ給てる神ハ詔給てる状ハ亦ず其下ハ時天照太神怒甚之曰汝是悪神不須相見乃與月夜見尊一日一夜隔離而住と所見たるハ其御前を遠放けさせ給てるより此一事を以ても天照太神の大宮の内ハ留まるくせ御在し坐し程ハ御睦び尊く御在し坐て其流離くて出坐べき御事をも何をも忘させたるが如く御在し坐けるを知やし若て此素戔嗚尊其より天津罪の御事をあも犯し給てゆけるに此ハ因て天照太神

天石窟ハ刺隠の御在し坐しるハ天地の底陰の内ハ常夜往て天地初判れてより以来せハ又とハ有まとりけるる大枉事と成りるに此を以て八百万千万神の神集ひハ集ハせ給ひて稍くハ祈禱の出し奉りしるハ諸神等甚く恍びて此より罪を素戔嗚尊ハ帰せて千座置戸の祓具を債り神逐ひハ逐ふとして此ハ既而諸神嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無頼故不可住於天上亦不可居於葦原中国宜急適於底根之国乃共逐降去と有が如く天上ハも住せ奉くず葦原中国ハも居くせ奉くず根国底国ハ出坐せとも神逐ハ逐い奉く

れしあり然れども此を於て高天原を解除を科せ
られし御事なむ素戔嗚尊の御上を取てし限無き僥
倖と成て此国土を天降り御在し坐し着て後を其御
子五十猛神を帥て下章第四一書第五一書等を所見
たるが如く許多の御功を立させ御在し坐て御心の
殘る所無く此顯国の事共を一先畢させ給へる御
心をて根国を入御むとおもほし下も其をだを擅を
私を為む事を憚り所思して天上を向ハして天照太
神を聞え上げ奉らせ給ハむとして此を諸神逐我伊我
當永去云々の御事を及ばせ給へる者をして其て

申すも下章第五一書を若使吾児所御之国不有浮宝
者未是佳也と有り又檜可以為瑞宮之材とあど有る文
を就て考ふるを彼誓約の御間を成出させ御在し坐
ける皇御孫尊を天照太神の御子として天降し奉り
む給ハむ御心構をて物為させ給へり御事を天神の
御許を顯ハし申奉らせ給ひかてら且ハ此下文を且
吾以清心所生児等亦奉於御と有る其事を申述させ
給ハむとして其即御父伊弉諾大神より事依され給へ
る彼蒼海原潮之八百重を天神を奉りて天神より皇
御孫尊を事依し奉給へるむ大御政を御在し坐む御

事を促がし申給へる事上件は註せるを以て明らめ
奉る可き御事なるむ有ける然るに此時は已に事竟
の辞見は参上くせ給へ御心まて又させ給へる
天降り御在し坐ける時は草薙御劔を此は得させ
給ひて天神は奉くせ給ひ又其時は主りて高稲田姫
命と御夫婦は成くせ給ふ可き由有て又此顕国は留
まくせ給は御子は大国主神を生給ひて国土経営の
御事を任ね置せるなど猶此国は留まくせ給へるふ
と此ハ予が常に云る如く顕宗天皇三年御紀は於是
月神著人謂之曰我祖高皇産霊尊有預鎔造天地之功上
と有が如く其と此と共は其大神の御霊は預り御
在し坐て物為させ給へる御事まて尊しと高しと
も云知ぬ辱ふ
き御事なるむ ○如何不與我卿相見而ハ瑞珠盟約章上
なる御父大神は申させ給へる御言は暫向高天原與
卿相見而後永退矣と有が如く始より天照大神は辞

見の御事を志し給へるより故其下は日神は疑いせ
御在し坐て質向し給へる御言は但父母已有厳勅将
永就于根国如不與卿相見吾何敢奈と御答申給へる
が如く日神は見え奉くせ給ふ為は参上くせ御在し
坐ける事上は註るが如し今此まても其御功業を果
させ御在し坐ける故は諸神は逐ハれる任は今已
は根国底国は入御在し坐むと所思し成つるより又
思ひし逐くせ給ひて此ハ已が擅は私は為ぞ事は
ハ亦ずと切りは慷慨ませ給へる御言はして本より
清明く御在し坐す御心を表ハし給へるなむ有け

○次章草薙劍を得まつり給へる所を素戔嗚尊曰是神劍已吾何敢私之乎乃上獻於天神已又其第五一書に有神劍素戔嗚尊曰此剣甚以吾私用已乃進之於天神云云吾根神上奉於天也有云云亦云云私之御行御年生ずる時大神の御本意を見奉り知べき所なり云云此言

る其委しき故由共は已る傳十五卷十四丁に云ひしが此は見合せて參上くせ御在し坐し其御心を知奉る可き者なり有ける○擅公綏靖天皇御紀に盛稱自由又清寧天皇御紀に也權勢自由あど所見たる共に保志伎麻こ尓と訓たる共に隨欲(ホリマヽニ)と訓たる事を云なり此意味を詠たる万葉五六令反感情歌に何米弊由迦婆奈何麻尓ここ都智奈良婆大王伊麻周許能提羅周日月能斯多波何麻久毛能年迦夫周伎波美企許斯遠周久尓能麻保良叙可尓迦久尓保志伎麻尓ここ斯可尓波阿羅慈迦と詠る是此の擅の意を註せるが如き歌なる者なり此も然まして此神の御

上まで天地の内に二無く高く貴き天照太神の御在し坐せば御心の任意に欲しき任なる私の御行ひい成させ給ひ難しと公正なる御言を発し給へるまふ也有ける通證に擅隨欲也と有ハ然る言なれど此以諸神之所逐而非日神之所南也と云るハ大ハ子に其取る所違てるる似たり此ハ本より其大神の思欲しき任に根底之国に入せ給いもとまり有ハども其辞見を此変なる為させ給ハずていハ私に出坐難しとなり○徑ハ瑞珠盟約章は徑詰向雪の下に傳十五百五十五丁に云り古事記白檮原宮段に袁登賣尓多陀尓阿波牟登と見え履仲天皇御紀に執兵者多満山中宜迴自當摩徑踰之と有て歌に於明佐坂(大)笛耳阿布夜鳥(過)等(少女)謎烏(の道)泳知(向)変沛麻(直)哆駄琪

破能（古）遲彌の呼嵯（當寧）寧知（通）烏能（古）流の と有り古事記なる其文自
當岐麻道廻越幸と有て此なハ正しく徑ハ廻の對な
用ひ〻ハたり又其朝倉宮殿な自日下之直越道幸行
河内と有る其ハ万葉六（二十六下）な直超之此徑尓師豆て
有る類なて其徑の正しく通りて廻る所無き謂ふり
天智天皇十年御紀童謡な奈尓（何）能都底（傳言）與（騰）多（直）拖尼之哉（豆）
雜武。など有る是なて此多陀の言ハ古事記御天降段
ハ朝日之直刺国と有を始として万葉なども多く直
字を作る是なり即立（タチテ）立（タチテ）なて物の真直な行通る事を
云ふ始なて其より物を隔てずして直な物為る義の言

なり但此を多陀知と云ふ手立の義なるも中有くむと
も所思なる物な對して手を置ず直な立懸
る由の義と
も所見めり ○復扇天扇国上詣于天の復字ハ次なも
吾弟所以上來非復好意とも（復上來者とも復上來事とも）有て同ト事の再重復ふ
る由なり此を以て見る時ハ此一書の始なる先な上
詣くせ給てゆし御事の有ひむを略りたゆし者ふ
る事著明くなむ有ける其事意を思ふ上な應な右の
如き文有る時ハ新宮本の如く此ハ瑞珠盟約章の一
書の中な收む可き文なり然るを此なハ御誓して御
子を生奉くせ給てゆし御事を此下な列ね入なるハ
混ひたる者なぐく其勢な引れて自然な略りたなり

し者ありけり但新宮本は此事以下を瑞珠盟約章の初は第一の一書は置たるなむ甚宜しきを其まゝ引替りて此の解除の御事と幸苦の一件とを其初は置て此の文をゝ〻收めたるを以思ふに中古よりも然る錯乱の有を見出たる人の有て如何なる其御誓の御事の此章は列れるを快からず思ふより已が私に其章を書加へたるのみにして其正しき無みける者なりけるし然れば此も故も五十歩五十歩にして互に得ざる所なむ有べりける故右の如く此を上は收れたるも猶撰者の意を汲取らざる所作て云者なして一の宜しき所有れば又一の狡意有て互ふ相謂はざる事なむ有けり此を以て事實を正し合せずて止終は其正しきを得ざる可し下百十

下は云ひ考合す可し扇天扇国は私記は安世辛宇古加之久尓宇于古可之天と有り又新宮本は此二の扇字下ふらは無くして扇天国と有て扇を同じく宇古加之天と有て私記の訓は同じ又右の如くは下は請姉照臨天国と有は合て宜しきが如くなれども其は唯天上を指て天国と云るまて天と地とを云は非れば猶本書の任は扇天扇国と有る方宜しくこそ所思えたりけれ然は有れども此下なる照臨天国は四神出生章第一の一書は即大日孁尊及月弓尊云と故使照臨天地と有は對て見るは下なる天国は即天地と云事は

て有けり其ハ天孫降臨章第十二書なる天饒石国饒石天津彦火瓊々杵尊を第六一書ハ天国饒石彦火瓊々杵尊と有り此即記傳三十一ノ天地を古ヨ天国と古ヨ云けむと思ふ由有りと云ひたる一説此ヨ惑ヨ徵有る事を知るヨ足ぬり然ればハ扇天扇国と有て一本又扇天国と云も一本ヨて即天国ハ謂ゆる天地と云事ヨて有けり欽明天皇の大御名を天国排開廣庭天皇と申奉れるも天地を押開り神能見霽志坐四方国者天能壁立極国能退立限と有る是なり然ればハ天地の事をも天国とハ古ヨ云しふより其古言ハ失果ヨれるなり傳三卷二十四十ヨ云り見る可し扇を古ヨ登與母志と訓る方猶右ヨ云る宇古加之ヨハ勝る可しむ古事記八千矛神御歌ヨ佐奴都登理岐藝斯汙登與牟景行天皇四十年御紀ヨ東夷多級邊境騒動ヨ動字登與美と訓る安康天皇御紀歌ヨ淤椰比芽能阿由臂能古輸禰於智珥岐芽淤椰比芽芽豫牟佐杜弭芽茂由梅公延体天皇七年御紀皇太子御歌ヨ奴都登制枳蟻矢播芽余武皇極三年御紀童謡ヨ鳥智可拖能阿婆努能枳枳始騰余謀作儒倭例播祢始柯騰比騰曽騰余謀須ふど見え万葉三四十ヨ南去歳立動戸之四二十八十ヨ野立鹿毛動而曽鳴六十四ヨ得物矢手狭散動有所見

武烈天皇御紀皇太子御歌ヨ岐已騰余淤那比芽我與制豆擬廣耶制枳武之廣柯枳

山七十八丁ヨリ大海之水底
堪三至浪之

山十二丁十九丁ヨリ神山之出ル
響遊水之十三丁ヨリ
鳴音之動而東

又十七丁鮪釣等海人船敬動又四十二丁狭男鹿者妻呼
令動又四十三丁秋吉者山震動響ル左男鹿者妻呼令響ル九
二十四丁ヨリ足日木之山彦令動呼立哭毛十二十三丁ヨリ山霍公
鳥令響鴨十一十四丁ヨリ雷神小動刺雲又雷神小動雖不
雷又三十三丁四長鳥居名山響ル又四十三丁里動鳴成鶏山十七
十一丁ヨリ多麻奴久月之来鳴登餘年流十八十九丁ヨリ播奈
治流等吉尓伎奈吉登余年流十九十丁ヨリ足引之八峯之
雉鳴響又十二丁安之比奇能山下響又十五丁往還喧等余
年礼等又十八丁鳴等余宋安麻不令宿又十九丁里響喧渡
礼騰母ゑど所見たり侑此ハ傳十五七十一丁ヨリ註ニ如

山ヨリ但先度ハ神性
の雄健ニ隨ヒ物為
さ給へるれハ然ハ有
ゑ也ニ此ニて信ニ義美
しさ御ヒ御年一美ヒ
参上ニ給へるれハ何
も平穏ニて御年一世ヒ
きヨ然ニ如ハ素ヒ素
戔嗚尊ニ御名ヒ貴
ヒ給へれハ然も有也可ヒ
御事ニて請神ニ逆ニ祀
給へるハ異ヒ之ヒ
事申すも更

く其瑞珠盟約章ヨ始素戔嗚尊昇天之時溟渤以之鼓
盪山岳為之鳴响此則神性雄健使之然也と見え古事
記ヨも乃参上天時山川悉動国土皆震と有ヒ其事を
此ニ簡易ヨ如此ハ云ヒ者ヒ又傳十九巻四百二十一丁ヨリ云ヒ踏登軒呂
許志の説考合すヒ可し右ヒ引ヒ如ク万葉ヨハ動をも
敬動をも響をも訓ヒ響ハ常ヨ比毘伎と訓も字ヒ
尓伊多刑都知佐倍由須礼と有ヒ比毘伎と訓も字ヒ
皆此動ヨも響ヨ比鼻伎波阿米
も富ルヒ者ヒ又右ヒ引ヒ私記又新宮本ヒ扇字を
しも字碁伎比と訓ヒ事ハしも万葉八四十八丁ヨ我屋戸
乃簾令動秋之風吹十四十三丁ヨ秋田苅苫手揺余刑十一
敷細枕動而十八十九丁ヨ伎久其等尓許ニ呂字呉枳

山の見之而ハ麻美延奉理氏と訓べし此

互あと有り纂疏ニ扇動也猶言動天動同也と有り口訣ニ扇鳴也とも見ゆ此ハ右ニ引る瑞珠盟約章ニ依て云るなり然れども動て鳴ハ異なれて鳴ハ動くるを云なれば体と用とニ於る如し○上請ハ麻章能煩理と訓べき事傳十五二十一下 昇請の下ニ註るが如し○天鈿女見之而ハ傳十九五百十六下 引る古語拾遺の天照太神ニ磐戸を出させ御在し坐ける條ハ爰ニ天手力雄神ニ引啓其扉遷座新殿則天児屋命太玉命以日御綱今斯利久迷縄是日景之像也廻懸其殿令大宮賣神侍於御前是太玉命久志備所生如今世内侍善言美詞和君臣向令宸襟悅懌也豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門是並太玉命之子也と見えたるが如く天照

太神を幸くして招奉るしるしを預て構設け置たり つる新殿ニ鎮め奉りて此より八天鈿女命即右ニ謂る後宮職員令の内侍の職掌の如くして仕奉給ひ天児屋命太玉命ハしも其日御綱ハ唯一時の事ニこそ有けれ拾遺ニ此天孫降臨章第二一書ニ復勅天児屋命太玉命惟尓二神亦同侍殿内善為防護と有て拾遺ニ宜太玉命幸請部神供奉其職如天上儀と見えたるが如く全く日宮の儀式是なれば其始此ニ在ける事申すも更なり此二神の御事即職員令の左右大臣の状なりける中ニも天児屋命ハ謂ゆる茂桙の中執持て

仕奉の給ふ中臣神ま御在し坐せば中務卿の職掌の
如くまて仕奉らせ給ひ太玉命ハしも宮内卿と其被
官なる木ま頭を兼たるか如く御在し坐し豊磐間戸
櫛磐間戸二神ハ左右衛門督（左右兵衛督など）の如くなる可く又八百
萬神ハしも八省百官の状まて御所（近く）まて仕奉らるこも（有べく）
国守郡領の如く遠境まて別れて仕奉らるこも有べく
して凡て天宮の御儀ハしも此まて至りて成整てる者
いまだ所見たりけるこの以前まも天照太神ハし
も高天原の大君主宰まて御在し坐す御事まハ
後くせ給へれども皇太神の天地の間まて二無く尊く

高く御在し坐すハ申すも更なる御事まハ有れども
皇太神の大御稜威の世まて現ハれさせ御在し坐すハ
専此磐戸隠の御時まて在て天地の庭際の内まて在と有
ひろ八百萬千萬神の皇太神まて従奉らせ給へるも亦
此時まて在ける事申すも更なり其ハ傳十五五十一十まて委
しく註せるか如し然れば此まて復素戔嗚尊の再天を
動もし国を動もし上天まて昇請らせ給へる度まハ然
事の整備ハれる上の事まし有ければ国守郡領の如
き神まりハ八省百官の状なる神まて申し延べく其まて
りハ衛門兵衛の如き神まて言傳ふ可く此まり殿内まて

侍らして防護を成し給ふ天児屋命太玉命を解知す
可く然して其御前を侍給ふ天鈿女命の許を告て皇
太神を聞え上奉る可き事ありければ皇太神申上
たまふ其状を見奉り認て申奉らずは有べからず此
を以て天鈿女見之而告言於日神也といふ有るのけり
然るに八百万千万神の各神集
ひ集はれて其素戔嗚尊を神逐ひ逐ひ奉れるも
諸神一同にての事なるを其深犯しの有し素戔嗚尊
の昇請らせ給てるを其素戔嗚尊を容易く日神の御
許近く侍らせる迄諸神の近著け奉らるる可きを
叩れば天鈿女命は御許より出て此を見え奉れる者
なる事
灼然し即大殿祭詞別を先に屋船命と称奉るを對へ
て其文を起して詞別白久大宮賣命登御名乎申事波

皇御孫命乃同殿能裏乎塞坐比参入罷出人能選比所
知志神等能伊須呂許比阿礼比坐乎言直志和志坐比
皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比礼懸伴緒褌懸
伴緒乎手蹟足蹟不令為比親王諸王諸臣百官人等乎
已乎乎不令在邪意穢心無久宮進米進宮勤之比米答
過在乎波見直志聞直坐比辛良気安良気令仕奉坐乎依
比大宮賣命止御名乎称辞竟奉久登白て所見たる此大
宮賣命は豊受大神を称奉れる御名なるを有れども又
此天鈿女命を大宮比咩命と申奉りて別るのなるべく
太抵は体と用との差別の如くして皇太神の御為な

ハ豊受大神許り親しく御在し坐す神の坐ざる由ハ
已ニ傳十九 五十七丁 七十一丁 註るが如く又此なる天鈿女命
も然るて其御前ニ侍ひ給ひて大宮仕を為させ給
へりけれハ此詞別ニハ天鈿女命の大宮比咩命と申
奉る御功の方主と成て有る事ニて廣成宿禰の如今
世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悅懌也と有ハ右の
神等能伊須呂許比何礼比坐 言直志和志坐 と云
と云るニ合ひ後宮職員令ニ内侍司尚侍二人掌供奉
掌侍奏請宣傳掖女嬬掌知内外命婦朝参及禁内礼
式之事と有ハ即右ニ同殿能 裏ニ 塞坐 参入罷出入

能選比所知志と有ニ合て信ニ内侍の職掌ニ異なら
ず然ハ此ニ天鈿女見之而告言於日神也と云るハ
實ニ奇しき迄合る者ありけり 但傳十九巻五百十四
詞別ニ謂る大宮賣命ハ實ハ其屋船命を殊ニ然申
奉れるまて其大殿を構仕奉る事ニ就て 屋船命
と称奉り又其大殿の事の作用を云ふ大宮賣命と
申奉れるまて其神の御上ニハ朝乃御膳夕乃御膳の
御事係りて両神の詞を別くべき者なり然るハ其
豊受大神ハ御膳炊の神ニ御在し坐し天鈿女命ハ謂
る比礼懸伴緒まして陪膳の神ニ御在し坐なを意
親しき所以有る御事なり能為ずハ混ぬ可し此事
肯ニ詳ニ
ずして有ける ○告言於日神也ハ外より告來れる任
ニ天鈿女命先見え奉て素戔嗚尊の來意を皇太神の大前ニ告言せる為り
○吾第所以上來非復好意ハ瑞珠盟約章第一ノ一書ニ

○天照大神其來意を疑ひ御立し坐て詔給ひ出ひたるなり

第所以來者非是善意と有を此ハ後の度ある故ニ後字を被加たる事例の如し傳十六六丁ニ註ハ又好ノ字と宇流波斯と訓べき事傳十五八十八丁ニ註せるが如し名義抄ニ即然訓たり又與志とも與美須と志とも波那波太とも許能年とも訓ミ又好恵を引合せて與志阿志とも與美須迩久美須とも有て善恵と同ト意ふる字なり○必欲奪我国者歟ハ瑞珠盟約章ニ當有奪国之志歟又其第一ノ一書ニ必當奪我天原と有ニ同ク即高天原の事なり我之国とハ記給ヘるなり傳十五八十九丁十六七ニ註ハ○吾雖婦女云々ハ其第一ノ一書ニ乃設大夫武備と有ル反對なり此ハ婦女ニ御在し

出と雖ト大夫ニ豈劣らめやと御身自慷慨して記給ヘるなり彼ニ設大夫武備と有ハ唯其御裝の御言ふハ古事記御天降段ニ故尓天照太御神高木神之命以詔天宇受賣神汝者雖手弱女人與伊牟迦布神面勝神と有ル婦女なり有れども射向ふ神として伺神ニ當りて面勝つ由なて大夫なハ勝ると云ふ慷慨の御言あるニ思合す可し神功皇后御紀ニ吾婦女之加以不肖然慙假男貌強起雄略と有ル此の意味を以て宜へる御言ニ在ハ又御裝なる是なり○何當避乎ハ那叙佐良米耶毋登詔給比毗と有ハ避ハ国を避ルとして何當避天原乎と云むが如し其御許を避せ給ふ謂なり非ず避なし

御事のことなるを此ハ反語の

佐久と訓む時は唯御許を奈〳〵せ給ふ意と成り佐流
と云ふは其所知有り御国を避給ふ義と成り古事記
八十神段
に故此大国主神之兄弟八十神坐然皆国者避於大国
主神所以避者云と天孫降臨章に向大己貴神曰云と
故先遣我二神駈除平定汝意何如當須避乎其弟二ノ一
書に向大己貴神曰汝将以此国奉天神耶以不云と吾
将自此避去即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣あど所見
出雲神賀詞に大八島国現事顕事令事避支の例皆
佐流と訓む例なり名義抄に避字を佐流と訓ろ人更
由久とも麻奴加流とも訓り又は能賀流とも比賀乎とも
此は佐流と訓むるむ叶ふ可きなり○躬装武備云云とは

瑞珠盟約章第一ノ一書に乃設大夫武備躬帯十握劔九
握劔又背上負靫又臂著稜威高鞆手握弓箭親迎防禦
と有を（効めなりと一書に有て其）如くに武備を装束ひ御立て坐て待せ給ふを
云なり装を與曽布と訓り例は古事記（明宮殿に自出
雲将上坐倭国而東装束之時と有る東装は御衣を上下
備ふる事を云なり（其明宮殿に上る武備に事有て下に歳餝と有は此の例なり橋）天武天皇十一年御紀に四月壬午
朔丙戌詔曰凡政要者軍事也是以文武官諸人務習用
兵及乘馬則馬兵并當身装束之物務具備足其有馬者
為騎士無馬者為歩卒並當試練以勿鄙於聚會若忤
詔者有不便馬兵亦装束有闕者親王以下逮于諸臣並

罰之と有る馬兵弄當身裝束之物務具備足と有る即
此の裝ヨ當ル り又軍防令ヨ凡私家不ル得ル敲鉦弩矛
楯具裝大角小角及軍幡ト有る義ヨ解ヨ具裝者馬甲也と有
り又和名抄征戰具ヨ鎧和名與呂比甲也と有る與呂
比と與曾布と同ト義ヨる曲傳五百ナ二丁天萬尊の下ヨ
註るが如ク万葉二三十五丁ヨ吾大王皇子之御門守神宮
ヲ裝束奉而三五十八丁ヨ白細ヲ舍人裝束而十十七丁ヨ朝
戸出之君之儀ヲ十二三十丁ヨ夢見而衣手取服裝束間
ヲ十三二十八丁ヨ大殿ヲ振放見者白細布餝奉而二十七
丁ヨ余ヲ波都ヲ余曾比余曾比豆ゑど有て物を寄せ

合せて身ヨ在れ形ヨ在れ具ヨふる義ヨり又二卷二十五丁ヨ
山振之立儀有山清水と有る儀と與曾比と訓べくい
古語拾遺ヨ宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀と
有る儀ハ儀式作法ヨ事ヨて裝束の謂ヨり非れども
與曾比と訓べきるの又右ヨ十三卷ヨ餝ハ三卷ヨる
裝束ヨ當れる所ヨ此を與曾比と訓べきヨ就て
考ふるヨ古事記明宮殿ヨ故間驚以兵伏河邊ヲ山
之上張絶垣之立帷幕詐以舍人為王露坐呉床百官恭敬
云こ侍余船時望其畫餝之處以為帝王坐其呉床云こ
と有る餝字も與曾布と訓べきより即此ヨ裝武備と
有ゞ同ト状ヨる所ヨる れば記傳ヨ加邪流と訓れ
ヒるハ叶ハず云云ハ纂続ヨ武備詳見于上故略之以云云字
包之也と說せ給へるが如ク即瑞珠盟約章ヨ所見た
る武備ヨ御有状ヨる御事を再度復ねて物為させ給
へるが故ヨ其所ヨ変任物て二度書されざる者ヨり

倩此二云より次文を稱て〻於是素戔嗚尊白日神曰
へ續く可き文(ふみ)あるべく其實八天鈿女見之而告言也より於是と直る文
日神曰吾弟所以上來非復好意必欲奪我之国者歟吾
雖婦女何當避乎乃躬裝武備云云と有ハ此度の御事
なハ似著ハしくも有る事共なり先ず廻復扇天扇国上
詣于天と有ハ窓ゟ窺窗ふ状ゟ思ハれ奉らせ給ハむ
事を遠慮くせ御在し坐て其神性の健く御在し
坐す任ゟ然事〻〻なむ態と物為させ給へると見
奉りても有ぬ可しと雖も右ゟ引ゟ日神の御言ハ古
史第六十三段微ゟ此ゟ御子生給へる事の初度ゟ上

坐る度の事なる上ハ復上り給へる時ゟ斯ゟ御言の
有まじき謂なり」と云れたるハ然ゟ言なり但古史ゟ
吾弟所以上來非復好意と云廻を取るれたれども予
ハ猶其をも取まじく所思えなり其ハ右三百九十ゟ註ゟ
が如く天鈿女命の見奉りて素戔嗚尊の來意を日神
ゟ告奉りて其辭見を日神ゟ直ゟ今申奉らるるゟ
れハ右の御言も猶初度の所より混れ入つる文なり
と正しく知るるなり古人の多く然誤れるハ天鈿
女見之而の見之而と訓るより事ゟて麻美延麻都
理氐と訓べき所なるを知るざれハなりけり已ゟ
雖言云ゟ

○必當為女兵。如此則可以降女於葦原中国。如有清心者。

し如く此神の御事は比くふるい甚恐き事なれ共後宮職員令の内侍司尚侍二人掌供奉掌侍奏請宣傳云と有る義解に謂奏而請其報と有も御中取持仕奉る事に當る是なり

於是素戔嗚尊誓之曰吾若懷不善而復上來者吾今嚙玉生兒。必當生男矣如此則可以使男御天上且姉之所生示同此誓於是日神先嚙十握劒云云素戔嗚尊乃�轡然解其左髻所纏五百箇統之瓊綸而瓊響瑲瑲濯浮於天渟名井嚙其瓊端置之

ヒダリノタナウラニテノドシセルミコ
左掌而生兒正哉吾勝勝速
ヒアメノオシホネノミコトノミタクヒラミギリノコヲカナレ
日天忍穗根尊復齧右瓊置
ソレヲミギリノタナウラニテノナレセルミコアメノホヒノミコトノマヘ
之右掌而生兒天穗日命此
イヅモノオミノサレノクニノミヤツコハヒノムラジラガ
出雲臣武藏國造土師連等
トホツオヤナリノツギニアマツヒコネノミコトノミハバラ
遠祖也次天津彦根命此茨
キノクニノミヤツコヌカタベノムラジラガトホツオヤナリノ
城國造額田部連等遠祖也
ツギニイクツヒコネノミコトノツギニヒノハヤヒノミコトノ
次活津彦根命次熯速日命
ツギニクマノヌノミコトノアハセラムシラノヒメヒコマスノ
次熊野大隅命凡六男矣

口訣ニ前章下同第三一書ト有リ如ク此ハ實ニ瑞珠盟約章ニ出ベキ文ニ前後相混雜ヒテ此ニ列ネタル者ナリ新宮本ニハ其章ニ一書共ニ四有テ此文其第一ニ出ヒタリ然レドモ其ハ中古ノ誰ヤシ人ノ手ニ

る成たる事あり けむ古より必然る本より有て傳はれる
まゝ有べくもあらず誰が目より其前後混雜れたる事より
見るるが故に此一書中より文を二に別て書籠たる
者とまむ所見たりけるも然れども其取捨の状未能も
盡さゞる所有て快からざるあり其全文を此に擧
て論つくふ可し其ハ一書曰素戔烏尊千座置戸之解
除以手抓為吉抓棄物以足抓為凶抓棄物乃使天児屋
命掌其解除之太諄辭而宣之焉世人慎收己抓者此其
緣也既而諸神噴素戔烏尊曰汝所作甚無賴故不可
任於天上亦不可居於葦原中国宜急適於底根国乃共
降去于時霖也素戔烏尊結束青草以為笠蓑而乞
宿於衆神衆神曰汝是躬行濁惡而見逐譴者如何乞宿
於我遂同距之是以風雨雖甚不得留休而辛苦降矣自
爾以來世諱著笠蓑以入中佗人屋内又諱負束草以入中佗
人家内有犯此者必償解除此太古之遺法也と有る文
ハ此一書の續きに遺る可きを右に出たるハ若くハ
一枝上に混れ入たるまゝや其始に在べき故諸神大喜
即科せる文此に在て右の如く二に割る時ハ断こと
成て互に文を成し難きを以て知るべくもあり然れハ其ハ
意を以て然為つるまゝ有べくもあらず右の一書曰より
所ての文ハ其章に出べくもあらざる語の出たる

る心を寄せて見る可し又其文も此一書も在が如く
故諸神大喜即科之素戔嗚等千座置戸を解除云々と
有べきなり思ふ可し又次る是後素戔嗚尊曰諸神逐我云今當永
去如何不與我姊相見而擅自徑去歟延後高天原上諸
于天時天鈿女見之而告言於日神也日神曰吾弟所以
上來非復好意必欲奪我之国者歟吾雖婦女何當避于
乃躬裝武備云云て有り本より此一書も遺る可き事
の彼處も出たり一事論無して雖も其外天の事ハ前
後共も二度有り御事ある故も置まして此も一ふ
出たるもの然れども右の如くまでハ此一書も再度
の御事足ハず成り又前章も入てハ剰る所なる出來

める其ハ右も引る是後素戔嗚尊曰云々天鈿女見之
而告言於日神也まてハ此一書も在べくして上三百十三
丁も云るが如く告言於日神也於是素戔嗚尊白日神
曰吾所以更昇來者云々て續きて必此一書の文なれ
バ上も在べきも亦ず但其中より高天原上諸于天時
の字を此も取て次る日神曰吾弟所以上來非復
好意云々の文の復字を除きて右の初度の時の事も
係べくして即前章も收まる可き文なるを初後共も
同ト状なる事の相違れる故も各混一も成て此も
ハ足ず役も餘れるなむ有ける又右の必欲奪我

之国者歟吾雖婦女何當避乃躬装武備云云ハ前章第
一一書ニ日神本知素戔嗚尊有武健陵物之意及其上
至便謂弟所以来者非是善意必當奪我天原乃設大夫
武備躬帯十握劔九握劔八握劔又背上負靫又臂著稜
威高鞆手握弓箭親迎防禦ト有を約めたる者なりけ
りハ再度の事ニハ似著ハしなくずして此ハ全く初
度の文なる可き事上三百十六丁ニ委しく辯へたるが如
し此ハ新宮本ニ就ての論なるが凡て此一書の状を
思ふニ初より黙混雑たる傳なりけむを撰者の其
任ニ書きれたるなるむを後ニ快よからず思ふ人の
有て正し書しけむを又其正し方も右ニ如くニ是以
て粗き者なりと知やしなど此一書ニ謂ゆる瑞
珠盟約の神事を此ニ出せるハ甚しき誤なる者なり

偖此ニ擧たる文ハ前章第三一書ニ同説なる事口訣
ニ註るが如し故今此を合せ試るニ此書ニ於是素戔嗚
尊誓之曰吾若懷不善而復上来者吾今當玉生児必當
生男矣如此則可降女於葦原中国如有清心者必當生
男矣如此則可以使男御天上物之所生亦同此誓於是
日神先嚙十握劔云云ト有て此ニハ其誓約の神言
を素戔嗚尊ニ申奉るを給へるなり然るを前章ニ
ハ日神與素戔嗚尊隔天安河而相對乃立誓約曰汝若
不有奸賊之心者汝所生子必男矣如生男者予以為子
而令治天原也於是日神先食其十握劔化生児瀛津島

姫命亦名市杵島姫命又食八握剱化生児田霧姫命と所見て其まてハ日神
の御方より誓の御言を発し給へるまて傳の状ハ等
しき物ゝゝ其自他の差異有て何れゝ其と辨まふ可
らゝざるが如して雖も此ハ互に文を略られたれし
者あるまて此一書ハ更まり前章正書第二一書共に
素戔嗚尊の御方より係奉らせ給へる御事なる有て
日神の其に應て詔給へる御言の有つゝむを傳へ
渡し又其第一一書第三一書等ハ日神の御方より
其に應へさせ御在し坐しる御言なる有て素戔嗚尊

より誓ひ申させ給へる御言の脱たるまて互に意を
補ひて聞くゝ可き事なるゝ由も相合せてゞ所知るめる
其事已に傳十六十八に註り舊事紀ハ此二を渡さ
若然者何以将明示之赤心汝言虚實何以為験素戔嗚
尊對曰請與姉共誓夫誓約之中必當生子如吾所生是
女者可以為有潔心若是男者可以為有清心則掘天之
真名井三處共天照太神與素戔嗚尊共稱天之安河而
相對乃立誓約曰汝若有新賊之心者汝所生之子必女
矣如生男者即以為子令治天原矣云と所見たる此
ハ此をも夫ハず彼をも捨しと唯集成したるのみに
て然る心用ひ方くゝめども暗に事實に相叶ひ
て甚と美好き又此ハ六男の說なるゝ事全く前章第三一
者なるゝ
一書に於るが如し然るに新宮本を見れハ素戔嗚尊
乃轡鹽然解其左髻所纏五百箇統之瓊綸而響瑲瑲と濯

浮於天渟名井嚴其瓊端置之左掌而生児正哉吾勝
速日天忍穂根尊後嚴右瓊置之右掌而生児天穂日命
此出雲臣武蔵国造土師連等遠祖也次天津彦根命此
茨城国造額田部連等遠祖也次活津彦根命次熊野櫲
樟日命凡五男矣と有て此ハ例の五男神の傳ふ
次熟速日命の五字無く又此一書ハ凡六男矣と有を凡五
男矣と曷かるハ此ハ錯乱有る事を思へて瑞珠盟約
章ハ移しかの人の所置ハ本より御紀ハ然有し
ハ非ス可し凡て此事ハ限りず實ハ正ハ然有てし
の如く有ハ中ハ人の手を經て成れる者ハ古意
ハ非る事し有る者ゆゑ然れども此ハ必五男ハて

有る所欲き
所ありし○懷不善ハ私記ハ與加良奴古止字於毛
比豆と有り此ハ上ハ非復好意の日神の御言ハ應へ
奉りて申奉るを給へる所ハ即前章ハ素戔嗚尊對
曰吾元無黒心ハと請與御共誓夫誓約之中必當生子
如吾所生是女者則可以為有潔心若是男者則可以為
有清心と見え第一ノ一書ハ吾元無惡心唯欲與御相
見只為暫來耳又第二ノ一書ハ請吾與御共立誓約誓
約之間生女為黒心生男為赤心と有る意を然言約め
たれ〳〵者ハ○復上來者ハ復字ハ此ハ上ハ云るが
如く前章ハ錯乱なれば無き方宜しと雖も此一書ハ

山二十三ヶ如是有乃識
知教導

再度の心まて傳へたるあれハ始より誤りて然有つ
るありけり○鬻玉ハ今本ニ鬻字ニ作れるを新宮本
ニ訣本ニ依れり即前章ニ齰然咀嚼此云佐我弥ホ加
武と有り傳十五 二百五十ニ云り次ニ瓊響瑲ニ濯
浮於天渟名井鬻其瓊端云ニ復鬻右瓊云ニと有る是
なり○如此則ハ加ニ良婆と訓ベし如此有則の義ホ
り加ニ流の例ハ鎮火祭詞ニ如是時ホ云ニ万葉五七十
ニ母智騰利乃可ニ良波志母與又四十可加良受毛可
賀利毛神乃末ホ麻仁等十一十三ニ此有恵不相十四
二十ニ伊祢都矢波可加流安我手字十七二十一ニ可加

良牟等可祢底思理世婆十八二十ニ遠代ホ可ニ里セ
許登字など有り此を加ニ良婆と云る婆ハ此則字の
訓ずても有ル可し○可以降女於章原中国ハ次ニ且御之所生
義なり然れハ此ニるハ須那波知と
ホ同此誓と有を見るニ日神の所生ニるニ女御子を
成し奉ニるセ給へニるむニるハ黒心御在し坐と云が如く
も見なれハなど然ニ可ニ〻ず吾女御子を生ニ日神
男御子を成し出させ給ハむを以て此方ニ不善の心
有ニ徴とし吾男御子を成し日神ニ女御子を生せさ
せ御在し坐むを以て此方ニ好意有ニ徴と成す可し
とて何れにしても雙方ニて男御子と女御子とを

所生坐る事まて諸共に男御子のみを生坐し女御子の
みを成給ふと云ふ倚よりて事まハ亦る可し此事
能為ずハ混ひぬ可き事共なり偖此ハ素戔嗚尊本よ
り清明き御心御在し坐が故に御身自男御子を生坐
むと所思しけれハ其ハ天神御子として立奉るむ其
に對せて日神に女御子を決めて成し出させ給ふ可
し其ハ葦原中国に天降し給ふ可き由を申させ給ふ
まてハ有けれども若然に有ずして此方に黒心の徵
所見て女御子を生成しなむまハ吾と共に直に天
降し給ふ可しと申奉るせ給てるまて即是御誓約の

山下四百二十九丁目
吾及清心所生兒等
の所に云り

御詞と申奉る者なりし然ハ其に葦原中国に天
二義に直る者なりと雖も其意を
得る時ハ信に分明しく聞めり即此傳ハしも專前
章第三一書と同說なるが其御子生竟てる後の文に
便取其六男以為日神之子使治天原即以日神所生三
女神者使降居于葦原中国之宇佐島矣今在海北道中
號曰道主貴此筑紫水沼君等奈神是也と所見たる此
即其結と成る所なり若て此一書ハしく即警戸段に
て素戔嗚尊の已に神逐ハれさせ給ふ所有り此ハ又
其再升くせ給てる所なり此末に且吾以清心所生兒
等亦奉於姉と申させ給てる御事有り右の一書に三

女神を天降し給ふ事有り又其第一ノ一書に乃以日神所生三女神令降於筑紫洲因教之曰汝三神宜降居道中奉助天孫爲天孫所祭也と有り其を引代りて宣給へる大御言なるを知る時は上よりの條理貫通りて甚と混ふ方無くなるを所聞えなりける此時に至りて尊の申奉るを給へる御誓約の御詞なるを以て其初の事共の心を著ずは有べからざる者なるを

○清心前章に出づ傳十五百八十八丁に註り○必當爲男矣の男を袁能古と訓り又右の必當爲女矣のの女を古本には袁年那古と訓たれども私記には女乃己奈良年と訓り倩此と同ト男女を前章又其第

一ノ一書第二ノ一書等に麻須良袁又多和夜賣と訓る第三ノ一書に至りて男字を此と同ト く袁能古と訓なり然れども其は各比古美古又比賣美古と訓奉るべきなるが故に予が傳るは然訓改めたるは此は口訣なれ前章下同第三ノ一書說と云るが如く其類說なる故に外とは異りて男女を袁能古又賣能古と訓來れるなるべきに就て此古言の失るを事の可惜しくて右の如く訓れるなり敏達天皇十二年御紀に韓婦を加良賣能古と訓れば袁能古と云も古き事なるはいム万葉二四十に男自物背梯持六二十五丁に取而可來男常

公皇極天皇三年御紀男女の子共の事を袁能古賣能古と訓る證紀第十三部に男能父名負又女能母名負と有なる物を阿礼と有なれば其例を訓れなり

曾念又二十六丁土巴母空應有七二十八丁ヨ此崗草苅小子十一二十一丁ヨ男士物屋恋乍将居と有て男又ハ士又ハ小子を袁能古と訓ミ古今集詞書ヨ秋三ツ日上の袁能古共賀茂の河原ヨ河逍遥しける云と又寛平の御時七日の夜上ヨ侍〳〵ふ袁能古共歌奉れと仰〳〵れける時云〻又貞觀の御時後涼殿の前ヨ梅の木有ける略中上ヨ侍〳〵ふ袁能古共の詠ける序ヨ云ふ此袁能古と云ヨ對てハ必賣能古と云言ハ有ぬ可き筈なる事右ヨ云る一二の例の如し然れども中昔より ハ此言余りヨ用ひざりけるに見當〳〵ず若義扨すハ女字を袁牟那又牟須賣又那牟遅又袁牟那古又賣阿波須などハ有れども賣能古と云言無し然れとも袁能古と云ヨ對てハ然云ずしてハ言の調ち〳〵ざるより

（催馬楽律の我門手ヨ和加こ止手止歌加字歌祢留手乃乃己云て）

○可以使男御天上ハ即右ヨ註るが如く上章第三ノ一書ヨ在る日神の御言ヨ汝若不有奸賊之心汝所生子必男矣如生男者予以為子而令治天原と有る是即此時の日神ノ御對なり又其末ヨ故日神方知素戔嗚尊元有清心便取其六男以為日神之子使治天原と有ハ其正書ヨ謂ゆる其物根の所由を以て日神の御子と爲させ奉給てるなり此ヨ依れハ此の天上ハ傳十四十八丁ヨ註るが如く天原と訓べきなり然れとも古本ヨ此天上を所采と訓るヨ理有る事ヨて万葉一二十四丁ヨ高知也天之御蔭天知也日之御蔭二三十六丁ヨ久堅之

天所知流君故ホ三五十八丁ヨ久堅乃天所知奴礼又吾王
天所知年賀ヨ有ヨ依て天上をも語の續きヨ隨ひ
て此ハ両米と訓む可きもの古事記ヨ天知迦流美豆比賣と申す神名の御在
し坐る右の天知し然る例るか如くなれども此ハ
天上を知の義ヨ非ず雨を知給ふ由なる事傳十卷百
十丁ヨ已ヨ云り ○所生を上るを字米良年と訓る即瑞珠
盟約章ヨ在て傳十五百八十五丁ヨ云ひ此なるを那志給
波年と訓る其ハ傳十六二十二丁ヨ云るが如くまて同ト
語の重なるを以て二ヨ讀分くれたゆ〜者なり○亦
同此誓ハ日神の御方ヨても男御子を生奉るを給ひ
て清き御心の表と為る義ヨてハ有べくもず如此誓相共ヨ

びさせ御在し坐す内ヨ素戔嗚尊の黒心御在し坐む
まハ女御子を成し出給ハむ其ヨ對へてハ日神の成
し出給てくむも男御子ヨ御在し坐む又清心御在し
坐せくむまハ男御子ず成出給ふも其ヨ對へてハ日
神の成し給ハむ御子ハ女御子ヨ御在し坐むと誓言
を立させ御在し坐けるより日神も其トを合ひ給ひ
て諾ハせ給てる證ハ上章第一ノ一書ヨ於是日神共素戔嗚
尊相對而立誓曰若汝心明淨不有陵奪之意者汝所生
児必當男矣言訖先食所帶十握劍生児云々九三女神
矣と有る此任ヨてハ日神ハ何ヨ依て誓給ふと云事

の知るべきを汝所生児必當女矣、我所生児必當男矣と云意を見て其義明らかなる可き事已に傳十六二十三丁に註るが如し又其第三の一書に曰日神の御言まも汝若不有新賊之心者汝所生子必男矣如生男者予以為子而令治天原於是日神先食其十握劔云々と有り（令治天原）天原の下まも吾如生女者汝以為子而令降於葦原中国の語を添て聞ざれば何の事とも真始末合ざる可し然意を補ひて見る時は天照太神の先に三女神を成し給て後時に已に素戔嗚尊に清心御在し坐ひ（彼正哉吾勝の御言を待ずして其ひ）所知食し分きせ給へるるものけり然れば妨之所生亦同此誓と云事は二神共に男御子を生奉らせ給ふが清くて女御子を成奉らせ給へるを黒きもの云義に非ざる者し心を者し可し○於是日神先嚼十握劔云々は前章第三の一書に於是日神先食十握劔化生児湍津姫命亦名市杵島姫命又食九握劔化生児田霧姫命と有る是なり此三女神の御事は傳十五より十八巻に至る迄委しく註し奉れば今此に云限まは非ざるを此に五男三女神の生出させ御在し坐ける御事を列ね擧たる其誤を此に序あれば云て其惑を解て也と其は此第一の一書に是後稚日女尊坐于齋服殿而織神之御服也と有は此三女神に渡る

せ給へりけり即天孫降臨章第一ノ一書下照媛の歌に
阿妹奈屋夜乙登多奈婆多迺と詠せ給へるハ在天也
第棚機之と云事にて其ハ栲幡千々姫命を古語拾遺
に天棚機姫神と申すに對して第棚機姫神と申奉る
御名御在し坐す證此に在る事なり又肥前風土記に
ハ此宗像大神をしも織女神と有るに彼此考合する
に天磐門(北齋服殿に御時と次なる)に御時に神衣を織奉らせ給へる神ハ何
れの神か御在し坐む右の二神共に相並びて仕奉らせ給へる故に栲幡千々姫命ハ天石門別八倉比賣
神と申す御名御在し坐し此三女神ハ天津石門別

稚姫神と申す御名御在し坐す事已に傳十九十百
二十十五に註るが如くなれば此三女神の御生坐を
瑞珠盟約章に收ざれば大に合ハざる者なり是其錯
乱を知べき一證なり又天石門別豐玉比賣神と申す
女を合せて玉依姫命と申すも此三神の御名なり其ハ此三
なむ度くせ給へりける但右等の事件ハ甚容易ならず
くざる說共なれば此に盡す可くも非ず各其所に云ひ考ふ可し又古史第三十七段
微に引れたる天孫降臨章第六ノ一書に天忍穗根尊云
高皇產靈尊(要)兒火之戸幡姫兒千々姫命而生兒天火
明命次生天津彦根火瓊々杵根尊其天火明命兒
天香山是尾張連等遠祖也第八ノ一書にも正哉吾勝々

速日天忍穂耳尊娶高皇産霊尊之女天萬栲幡千幡姫
為妃而生児号天照国照彦火明命是尾張連等遠祖也
次天饒石国饒石天津彦火瓊々杵尊と見えて天火明
命ハ饒速日命の御事ニして瓊々杵尊の御為ニハ御
兄ニ当り其天香山命ハ天孫本紀ニ天照国照彦天火明
櫛玉饒速日命天道日女命為妃天上誕生天香語山命
と所見たる是なり其第四十六段微ニ石凝姥命天香
山命同神なる由ハ神宮雑例集ニ引る神宮記ニ鏡作
遠祖天香山命と有を神代紀ニ鏡作遠祖天抜戸児石
凝戸邊と有り石凝姥命天香山命同神なる上ハ天抜

戸神天火明命同神なる事論無し」と云はたるニ意を
得て猶又予深く速く考査して定たる説有て其ハ傳
二十五十二十一四十二下ニ已ニ委しく註るが如し神名
式ニ越後国蒲原郡伊夜比古神社名神大御在し坐すを
一宮記ニ天香山命と有り其伊夜比古と申す神名ハ
天照太神素戔嗚尊ニ御子天忍穂耳尊ニ渡らせ給ひ
御孫ハ饒速日命ニ御在し坐し曾孫ハ此天香山命ニ
坐せバ孫ニ子たる由を以て祢奉れる神名なり此
を以見る時ハ其御孫と有る天抜戸神曾孫と有る石
凝姥命共ニ此天石窟殿ニて即鏡作神ニして仕奉給

へるなり此を以て五男神の成坐る事如此く素戔嗚
尊の神逐ハれの後に在る事如何ハ疑ハしきなり
也是其二證なり然れば伊夜比古と云ハ曾孫を和名
抄に比く古と云るなりハ古き語ふ
りけり已に若く御曾孫に御在し坐す神まくに此事
に預りて仕奉るを況て四其御子と御在
し坐す三女神なるをいハ専其御祈に又姓氏録山城国神
預くせ給てる事著明き者なり別天孫
に山背忌寸天都比古祢命子天麻比止都祢命之後也
と有り然るに古語拾遺磐戸段に令天目一箇神作雜
刀斧及鐵鐸と有て謂ひく五男の第三なる天津彦根
命の御子已に此に鍛冶神にて出給てり又古事記
同段に取天金山之鐵而求鍛人天津麻羅而科伊斯許

理度賣命令作鏡と所見たる其鍛人神ハ誰に御在し
坐む師に定めくれたるが如く天目一箇神の亦名に
御在し坐す事申すも更なり曲十五 二百七十丁 十七九十七丁
に註るが如し此も亦天照太神素戔嗚尊の御為にハ
御孫に渡くせ給てり即是三證なり此等の事共を以
て見る時ハ此に五男三女の神等の生出させ御在し
坐ける傳に有ハ入混ひたる者にして即已に口訣に
前章下同第三ノ一書説と云ひ混乱前後之説子と云る
ハ實に謂れたる説なる者なり然れば こゝ上三百二十丁に註るが如く新
宮本にハ此五男三女の神等の生出させ御在し坐け
る御事を此より抄出て瑞珠盟約章に初の一書にハ

置たりけれ加何なれも然無てハ叶ふまじきを所ふまじきむ ○轆轤然此云字謀苦留と
尓の字謀ハ綸ヲモ亦ふまて即次ふ謂ゆる五百箇統之瓊綸
を云ふり苦留と尓ハ口訣ふ解戔瓊綸貌と有が如く
俗ふ物を結ぶふも解ふも久流久流登と云ふ是ふり
其字撓挑と書ふを字書ふ宛轉循環貌と云り又名義
抄ふ轆を櫨也と注され轤を圓轉木也と注されふ
其字義ふ合ひて知ふる可く此字を書れたりけふ者
ふり古事記ふ大倭根子日子国玖琉命を御紀ふハ大
日本根子彦国牽天皇と書し奉れふも牽ハ括む意ふ
て其も此ふり出たり和名抄車類ふ車和名久留萬又

輦和名天久流萬為輕輪人挽所行也又副車和名曽用
久流萬俗云比度大萬比後余也ふ有ふ久流萬ハ旋
回の義ふり又鸞輅具ふ反轉久流用抄漢語抄説同と
以緣車訓久流絡絲取也と有を万葉七三十ふ河内女
之手纒之絲字絡反又三十三丁真田葛原何時鴨絡而我衣
将服と所見てサふ繰綿又ハ繰絲と云ふ是ふり又轉
日次又轉暦日又轉星宿又轉轆轤ふも云ふ久流
も皆旋くと廻ふす義ふり源氏花宴巻ふ久流と戸ふ
釣刺固め来し云と有ふり即掩機の事ふり此等ふ類
を以て苦留と尓ハ撓挑て廻ふず義ふるを知べし又郭

万葉二十三十三丁ふ年浪他麻乃久留年久積作之加多糸等之と有を取て

字を久流和と訓るも曲輪と書く其字の義なり
田畠を久呂と云も田の外輪なる謂なり又万葉十五
卷(三十丁)に君我由久道乃奈我仁子久里多と祢と有
も凹凸はすて其も圓くなるを云なれど皆同類
の言なるを知べし通證すれ右の和名抄の反轉又い
繆るなどを引て廣韻轜轜車屬也又不絶貌楊雄羽獵賦
續紛往來轜轜又絶と云ひ又纂疏すい不絶之義謂瓊
玉緒綸之不絶也と所見なり然れども久流と物
の循環るを云が本なりて○瓊響滄と此云字奴雞々等
不絶と云ひ御て未なり（次ページ瓊端をも然訓ども）次なる瓊響を訓を字
（毋）い（曲）（羅）（糸）綸ハ迩能袁と訓べし
奴雞等と云ハ綸瓊之音の謂なる是なり古書中に此
の瓊綸と綸瓊の外ハ多くハ多麻能袁とのみ有り古
事記三貴子段に即其御頸珠之玉緒と見え海神宮段
豊玉毘賣命御歌に阿加陀麻波袁佐宛比迦礼杼云と

玉垣宮段に亦腐玉緒三重纏手云と握其御手者玉緒
且絶云と亦所纏御手之玉緒便絶故云と有り又
万葉三(五十九丁)に玉緒乃不絶射妹跡四(五十五丁)に玉緒字沫
緒二搓而結有者在手後二毛不相在目八方七(二十七丁)に
玉緒念妻家在矣又(三十一丁)白玉之結絶樂思者又玉緒
云者人将解八方又照左豆我手尓纏古須玉毛欲得其
緒者皆而吾玉尓将爲十(十八丁)に玉緒長春日子十一(三丁)
に玉緒之念乱而又(又凡爲玉而用年貫緒緒依後相物)四十(一丁)玉緒之不絶常念又生緒尓念
者若玉緒乃絶天乱名又(四十二丁)玉緒之絶而有恋之又玉
緒之久栗縁乍末終去者不別同緒将有又片緒用貫(而)有

玉之緒弱乱哉為南又玉緒之島意哉又玉緒之間
毛不置欲見又四十玉緒之絶而別者十二二十六丁ヨ玉緒
字片緒ホ搓而緒字弥弥又玉緒之長命之又玉緒之絶
而乱而又評五緒乃徒心哉十三三十一丁ヨ玉緒乃長登君者十六十四丁ヨ真
珠者緒絶為ホ伎賀又白玉之緒絶者信十九二十八丁ヨ珠
緒之惜盛ホあど所見たるハ玉をしも貫て頭ヨリ手連ね頸ヨリ
ヨも足ヨリ懸る物ヨる故ヨ玉緒云ふ右ヨ引る
ハ多くハ発語ヨるが其ヨリ長しとも搓ヨるとも結ぶ
とも貫とも括くとも纏とも絶とも弱しとも解
とも別るとも移しとも緒ヒとも惜とも間とも様とヨ係る辞ヨり

けり又冠辞考ヨ引れたる万葉十二二十七丁ヨ桑子ホ毛
成益物字玉之緒許十四四丁ヨ佐奴良久波多麻乃緒婆
可里又伊勢物語ヨ逢ふ事ハ玉緒許り所思ホえて徒
き心ヨ長く見ゆるむ」と有るとハ實ヨ短く僅ヨる意
ヨる續きヨる者ヨるべし」同書ヨ巻十ヨ玉緒長春日
字と有ハ玉を貫る緒ヨ就
て長きと續けたるハ然る事ヨるべし」と云れたるハ然る事ヨるべし
右ヨ引る同巻玉緒之島意哉と有る島ヨ長字ヨ改る
れたるハ誤ヨり共り玉緒ヨ緒ヨと云ふ續きヨり又
同考ヨ絶ハ緒ヨり絶と續けヨ又弱るヨる云ひ又ハ貫
たる緒ヨ断て数ヨ玉ヨ乱るヨ思ヨ乱るヨ冠くしめ
又ハ同ト緒ヨ数ヨ玉を間無く貫たるヨて間ヨ置ず
てふ語ヨ冠くしめ又ハ絶たる緒ヨり新しき
緒ヨ移し貫ヨ係て移心て云るヨリと云れたるハ然る
言ヨり右ヨ渇れたる珠緒ヨ惜と續けるハ出雲神賀詞
ホ青玉能水江玉乃行相ホて有が如く玉と玉と行合

ハヨリ古今集ヨ秋ヨリ離れて玉を色まりの是ヨる也夏ヨ吉部ヨ見むりして詠ヨ本ヨリ玉ヨ移ヨとの詠ヨ有を以て

ひ解當ると云事なり此玉緒の事ハ傳八卷十丁
まで已に註れたれども此の瓊緒又瓊端又緒瓊と云も一事
なるが故に引出て云り○解ハ私記に比支止支豆と有り新宮本
又古本の訓も皆然り即口訣に轜轤然解曳瓊緒貌と
有る解曳是なて曳ハ引結ぶ引放つなどの引と同じ
我が方に物を引寄るを云なり解ハ紐を解く帯を解
くの解なて此ハ其御髻の所纏りし瓊緒を引解き持
曳き放れた給へるを云なり右に引る万葉七三十一丁に
玉緒云者人特解八方と有る是なて上に所纏と有る
五百箇統之瓊緒を挠挑と本に復し解曳く義なり又纏
と結ぶと通ひて万葉十二卷十五丁に真玉就越乞
兼而結鶴吾下紐之所解日有年也と有る如く玉を纏

ハ一所のみなるず結合する事なりと見えて彼方
此方と續けたるなり其事を下紐に寄せて上ハ結
鶴と云ひ下ハ所解と云るなり○瓊響玲二此云字奴儺等母と由羅
尓ハ字奴儺等母ハ緒瓊之音亦なる事右三百三十四丁に註
るが如し母由羅尓の事ハ次に云べし備私記に瓊響
玲を奴奈刀毛由良尓師說云作者所誤也と云るハ
此なハ右に四字を書されるを下なる訓注の所に
ハ古くより瓊響の二字を脫せるを云と所見なり此に
てハ緒に當る字字と母由羅尓の母字とを脫せり又
新宮本にハ玲を字此云奴儺等母由羅尓と有て私記
と專同じ事なるなり此なハ瓊響の二字を脫せるが

上の瑲〻字と有べき所なくざれば役給の當る字字を校意の上の屬たるまて作者の本意まい非る可し此まい他の例とい異ゆて字奴儺等と有る深き味有る事なれば此ハ此其ハ其なり削去る事勿れ古事記三貴子段の即其御頸珠之玉緒母由良迩と有を御誓段まハ奴那登母と由良ホと出たり一まハ玉緒と云ひ一まハ奴那登母と云て下る由良ホを續くを合せても必此ハ字奴儺等とハ云つ可き狀なるべし然るを古本の瓊響を迩能於登と訓るハ中古の頃ハ瑲と此云字奴儺等母〻由羅ホと作る本の有るに依て然思誤れるなり新宮本の鄉音字を奴儺等母と訓りの瓊字ハ脫たるなるべし訓ミハ古きの從へる者ハ

ハ俗通證の蓋字奴緒音也儺等母語助と云るハ誤ふハ辭の之を那と云事速吸之門を速吸名門と云例是なり○瑲瑲を下る母由羅ホと注せるハ眞動の義なり口訣の瑲瑲玉声と有ハ天孫降臨章第六二書の手玉玲瓏と有も然訓るハ口訣の餝掌際玉音と有ハ万葉十一五丁の玉響昨夕見物今朝可恋物と有も玉の動く音の思ふ人の來るを知て相見たりと云ふ續けるり十三八丁の響有領巾文光蟹手二卷流玉毛湯良羅ホ二十五十八丁の始春乃波都祢乃家布能多麻裝波伎手ホ等流可良ホ由良久多麻能手と有るハ何れも玉の由良久と云例是なり此ハ玉の限るず鈴なるとも云事

（通証まこの詩小雅八鶴鳴を傳鶴と云ひ又定家卿歌に五由良も寄も消も留まるまで無き人恋ふる宿の秋風又五由良は昨日の夕見し物を今日の旦まで恋ふる可き物にまさりて見え鴨長明の方丈記まで何れの處を占め如何なる所作を成しけん暫し此身を宿し五由良も寄も恋む間と有り）

まして顕宗天皇元年御紀に於是老嫗奉詔鳴鐸而進天皇遥聞鐸声歌曰阿佐賦（淺茅原の小曽祢過の百傳）敷曜鳴贈祢鳴須擬（動）摸謀豆拖（置）甫奴庭喩羅俱慕與（目來）於岐毎但羅之慕と有を釋に朝動鐸老嫗來之由也と見え万葉十三に真割持小鈴文由良尓手弱尓吾者有友十九十一に白塗之小鈴毛由良尓など見えたる何れも鈴の鳴音を以て云ふなり由良の事は已に傳八三十九四百三十七十九十七に註り又十五卷二百五十八十に註せる如く彼御誓の時に瓊に依て成坐る三女神をしも五依姫命と申奉れるなるに亦名を由良比女命とも申奉れるなるに亦由良も亦右の由良に異なるまじ○天淳名井傳十六三十七に註り○濯浮は古本に須と岐字気色と訓り濯は

前章濯於天真名井の下に云ひ浮は其第二の一書浮嘗於天真名井の所に云り傳十五二百四十七五十七に委しく斯るに新宮本に浮を字碁加志と訓るも一理有る事なり上に轡（ヲモクル）轡然と云ひ瓊綸を解と云ひ瓊響瑲と云ひて今茲に水上に濯がせ給ふ所なる故に浮字を動りすと訓む事古事記に振滌天之真名井と有に打合ひて何怜き事なるなり振て云も即動りす事なれば水上にて浮び取り振濯がせ給ふ状に信に然も有けむと想像り奉るに御事なれば（但浮を字碁加須と訓る義は然る事なれば人の耳目を驚りさむ事を怖れて猶舊きに従ふ者なり見む人其宜しきを取べし）

消印

山前章第三ノ一書ニハ素戔嗚尊命ニ其左髻所纏五百箇統之瓊繞之瓊ト有テ右ハ瓊々合給ふるを此ハ其緒ヲ嚙斷給ふるなり

○瓊端ハ迩能袁ト訓ム即上ニ謂ふる五百箇統之瓊綸是なり然るに上章第二ノ一書ニ瓊端瓊中瓊尾ト三相並べる端ハ初中後の初ニ當れるなれハ波志ト訓べき事本より然るを此ニ同ク端字を袁ト訓るハ然るに始終を對云ふ所なるべしが端緒ト熟する字を用ひて其括りたる瓊綸の端方を嚙斷て其粗あらく御掌ニ置ヒ給ひて珠子を成し給へる趣なれハ迩能袁ト訓て有ぬ可き事なり通證ニ瓊端書訓ハ乃波之ト宜從ト云るハ能き心著なるべし前章第二ノ一此ハ唯其瓊綸を解て碎き別ち給へるのみ○置ヒ左掌ハ前章第三ノ一書まハ著於左手掌中ト有て其ハ

国立公文書館
National Archives of Japan